鳥毛裙、今世駝褐之類也、不得爲雨衣云、

〔伊呂波字類抄安雑物〕雨衣アメキヌ

〔書言字考節用集六服食〕雨衣（アマギヌ）今世桐油、一名油衣、並出順和名、

〔圓珠庵雜記〕あまごろもにみつあり、天衣と、雨衣と、海士衣となり、略○中あま衣たみのゝ島などつづけたるは雨衣なり、

〔北邊隨筆二〕雨衣

敏達紀云、是日無雲風雨、大連被雨衣云々、この雨衣といふは、油衣にやあらん、略○中後撰集に、ふる雪のみのしろ衣うちきつゝ春きにけりとおどろかれぬる、とよめるは、蓑代衣の心なるべし、これも又其制つたはれるにや、さらず、文永加茂祭、また年中行事の繪卷物に、手に持ちたるもの、雨衣なりといへば、その圖をこゝに載す、略○圖

〔倭訓栞中編阿〕あまごろも略○中　田蓑島に屬けよめり、日本紀に被雨衣をあまよそひと訓せり、倭名抄には、あまぎぬと見えたり、油衣も同じ、隋書に見ゆ、中國四國に、雨ばおり、肥後に、ざうりん、伊勢に、ざうりといふ、時雨變成べし、

〔物類稱呼四衣食〕雨衣あまぎぬ和名　江戸にてもめんがつぱと云、中國四國ともにあまばをりといふ、肥後にて、ざうりんと云、大和にて、ざうりがつぱと云、伊勢にて、ざうりと云、今按に、ざうりといひ、ざうりんなど云、是は時雨凌成べし、

雨衣初見

〔日本書紀二十敏達〕十四年三月丙戌、物部弓削守屋大連自詣於寺、踞坐胡床、斫倒其塔、縱火燔之、幷燒佛像與佛殿、既而取所燒餘佛像、令棄難波堀江、是日無雲風雨、大連被（アマヨソヒセリ）雨衣、

雨衣用法

〔西宮記臨時五〕行幸略○中

京内略○中